

内部告発者：1 隠蔽相次いで発覚



ケイ・スガオカさん

2002年8月に発覚した「東京電原発ひび割れ隠し事件」。

事件を明るみに出したのは、米国の原子炉メーカー、ゼネラル・エレクトリック社(GE)の1人の社員による内部告発だった。

00年7月3日、1通の英文の手紙が霞が関の通産省に届いた。

東京電力福島第一原発1号機の原子炉内の装置に6カ所にわたってひび割れが入っていた。

る。それを東電とGEとで隠蔽(いんぺい)している――。

手紙は資源エネルギー庁の原子力発電安全管理課あてで、差出人はケイ・スガオカとある。

89年に1号機を検査したGEの技術者だった。

「私は1号機の蒸気乾燥器を目視検査していました。ひび割れが見つかり、東京電力は巨額の費用で、これを新しいものに取り換える必要がありました」「巨額の費用」だけ太字だ。手紙には1号機の「目視検査報告」のデータシートが同封されていた。

原子炉の圧力容器の中にある蒸気乾燥器の絵があり、右横のコメント欄に「ひび割れが観測された」と英語で書き込まれている。その数、6カ所。場

所や長さも明確に記されている。

「私は、たくさんの沸騰水型炉を検査してきましたが、「こ」まで傷ついた蒸気乾燥器は見たことがありませんでした」

「しかし東電の依頼に基づくGE上層部の指示で、ひび割れが映らないように意図的に編集したビデオが通産省向けにつくられました」

1号機を製造したGEは、その定期点検を東電から請け負っていた。そのGEと東電が共謀して原子炉内のひび割れを隠蔽(いんぺい)した――。そんなスキャンダルを内部告発する手紙だった。

通産省は直ちに東電に問い合わせた。しかし「そのような事実はない」との回答が返ってくるばかりだ。

スガオカの手紙に同封されていたデータシートの絵を突きつけた。

それでも「当社は承知していない」との返事である。

01年、原子力安全・保安院が発足した。保安院はGEに、調査への協力を依頼した。

GEが記録を調べ直すと、02年に13の原発で、ひび割れをふくめて29件のトラブル隠蔽疑惑が見つかる。

大騒ぎになった。



福島第一原発は米GEの技術で造られた。そのGEの内部告発者が原発の裏の裏に光をあてる。(奥山俊宏) 朝日デジタルから

内部告発者：2 17基すべて止まった

2002年8月29日夕、原子力安全・保安院の原子力発

電検査課長に就任して間もない梶田直揮(かじたなおき)(57)は、上司の命令で緊急記者会見を開いた。

内容は、ケイ・スガオカ(62)の内部告発に端を発した東電のトラブル隠しの問題だった。

「東京電力による点検作業の記録の不正の疑いにつきまして、私どもが調査を進めている、ということについて、「報告をさせていただきます」

梶田はそう話し始めたが、頭の中は真っ白だった。事件の全貌(ぜんぼう)が理解できていない。しかし「29件のトラブル隠し」が一部の報道機関にスクープされる恐れが強まり、急ぎよ、会見せざるを得なくなつたのだ。

梶田は7月の就任直後、スガオカの内部告発の話を初めて聞いた。それまで保安院は、告

発者のスガオカに直接会って事情を聴いてはいなかった。「何をやってたんだ」と梶田は驚いた。梶田の目から見れば、把握していた隠蔽(いんぺい)疑惑そのものはそれほど深刻なものではなかった。事故に直結するようなトラブルではない。

より深刻だったのは、東電の言うこととどこまでが正しいのか、それを断定できない、ということだった。

過去の記録のどれがどう改ざんされたのか分からない。どこまでが信用できるかも分からない。ということは、安全を脅かすような欠陥が隠蔽されていないと言い切ることもできない。

保安院として安全を確認できたわけでもない。そんな原発の運転をなぜ認めるのか、世の

中に説明できない状況だということとはよく分かっている。かといって、東電のすべての原子炉を停止させて、一から検査をやり直すべきなのだろうか。

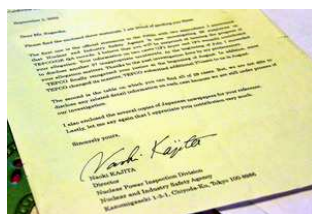
京都大学の大学院で衛生工学を修め、土木の技官として1981年に通産省に入った。技術政策を専門としてきた。原子力に詳しいわけではない。

梶田自身が悩んでいた。にもかかわらず、会見では何らかの説明をしなければならなかった。

トラブル隠しが報道されると、原発の地元では憤りの声が噴出した。福島県知事・佐藤栄久(さとつえいさく)(74)は国を強く非難した。

「考えれば考えるほど怒りがこみ上げる」

03年4月15日午前0時、東電が福島県と新潟県に持つ17基の原発すべてが停止された。
内部告発者：3 認められた正義



梶田課長から

届いた手紙

2002年8月29日、東京電力の原子炉ひび割れ隠しを公表した原子力安全・保安院の原子力発電検査課長、梶田直揮(57)は「頭が真っ白」のハニツク状態だった。

それだけに、内部告発者の元GE社員、ケイ・スガオカ(62)のことが心配だった。

スガオカの手紙を受け取って以来の2年間、東電は保安院の質問に回答を引き延ばし、ウ

ソを答えてきた。真相が明らかになったのは、保安院がスガオカの紹介でG E関係者に直接問い合わせたからだ。

彼の手紙が役立ったこと、話のないまま突然の記者会見になつてしまつて申し訳なく思つていることを伝えようと思つ。会見後、役所の自席から米国のスガオカに電話した。

スガオカはそのころ、内部告発のことをあきらめかけていた。

「もう一通、手紙を書こう。それで何の反応もなければ、このことは忘れよう。東電を相手に闘うのは無理だったのだ」

そんなところへの梶田の電話だった。スガオカは事情がのみ込めず、とんちんかんな対応になつた。

梶田は改めて9月3日、スガオカに手紙を書いた。

「東京電力は最終的に8月初旬、あなたの正義を認めました。あなたの情報のおかげで、さらに多くの不適切な取り扱いが判明しました」

英文でそうつづられた手紙を、スガオカは大切に保管している。

スガオカの告発は、内部告発をした原発労働者を保護する法律の適用第1号だった。「改正原子炉等規制法」。00年7月1日に施行され、スガオカの告発は3日に届いていた。

スガオカが通産省に送った検査報告のデータシートの原本は、G Eに保管されていた。内部告発があつた00年7月に東電の社員がG Eに行つて確認している。

しかし東電は、G Eに「保管されていない」というウソの報告書をつくらせた。東電は01年8月8日、保安院にそのウソを報告している。

保安院は10月、スガオカの線でG Eやその関係者に直接、情報提供を依頼する。G Eは02年1月、「検査報告書はある」と回答してきた。だが、その提出に東電の承諾が得られない状態が続いた。

3月8日、本物の報告書がやつと提出される。同月19日、G Eは保安院に「完璧な調査」を約束する。他の原発も含む「29件のトラブル隠し疑惑」は、そこから芽づる式に出てきた。

内部告発者：4 福島が反旗を翻した



福島県知事

佐藤栄佐久・前

2002年8月29日、福島原発でひび割れ隠しがあつたとの原子力安全・保安院の発表で、地元の福島県は大騒ぎになつた。

翌30日、三役打ち合わせで県知事・佐藤栄佐久(74)は「われわれの相手は経済産業省だ」と宣言する。

「東電の社長のクビを取つたり、プルサーマルを止めたら終わり、ではない。経産省はさつと逃げるので、トジョウを逃がさないだけのザルを用意しな

ければならない。いよいよ本番が来た」

。フルサーマルというのは、使用済み核燃料のリサイクルの手法の一つで、国の原子力政策の大きななめとなつている。佐藤はそれに反旗を翻したのだ。

9月9日の県の部長会でも、佐藤は訴えた。

「東電問題は、原子力政策の体質の問題として信念をもって、命がけでやってきた。苦労したが、私どもの主張が結果的にこつた。本県が命がけでやってきたことは間違いではなかった」

自民党参院議員から知事となつた佐藤は、もともと原子力政策に協力的だった。しかし、知事として問題に対応しているうち、国のやり方に疑問を感じるようになる。

もつとも大きかつたのが、使

用済み核燃料の問題だった。通産省の課長は1993年、青森県の六ヶ所村に運び出すと佐藤に約束した。しかし翌年、その前提となる第2再処理工場の計画の先送りが国の原子力委員会が決まつた。

国がウソをついた——。佐藤は「許しがたい」と思った。以後、佐藤の反発は強まっていく。

01年、佐藤は、県として国のエネルギー政策を検討する会議を設けた。「どこで原子力政策は決定されるのか」「情報公開は十分に行われているのか」と問いかけた。

02年4月には、核燃料1キロ当たり1万1千円を課税する重量税を新設する方針を明らかにし、東電は猛反対していた。そのさなかに、内部告発が公表されたのだ。

02年9月24日、福島第一、

第二の両原発がある双葉郡の町村長や議長との懇談会では、佐藤は「保安院と東電は同じ穴のムジナである」といいきつた。

政府も東電も、核燃料税の増税を受け入れざるをえなくなつた。経産省の一部の官僚の間には、原子力政策の見直しを真剣に考えようとする動きも出てきた。

佐藤は勝利したかに見えた。

内部告発者：5 あおられた電力危機

2003年4月15日午前0時、東京電力が福島県と新潟県に持つ17基の原発がすべて停止した。

東電のトラブル隠しに地元の福島県と新潟県が反発し、点検で停止した原発の再稼働が不可能になってしまったのだ。

カギは、福島県知事・佐藤栄

佐久(74)が握っていた。佐藤は「命がけの闘い」と呼んでいた。

佐藤のその闘いは、優勢のうちに進んでいた。のちに佐藤はこう語っている。

「だいたい勝つてました。われわれが『うん』といわないと、国も東電も何もできない状況でしたから」

しかし、世間の関心は国のエネルギー政策ではなく、停電に向かう。真夏に大規模停電が発生する恐れがあると、「首都圏の電力危機」があおられ始めた。

「市民生活は大混乱に陥り、生命の危険さえ生じうる。経済的な損失は大きく、国際的な信用も失うだろう」(読売新聞7月4日付)

「早急に合理的決断を」(日経新聞6月5日付)

米紙ニューヨーク・タイムズは「原子力が暗闇かと東京が問われている」と報道。英誌エコノミストは「暗闇が東京に降りかかる」という見出しで「日本の電力業界の混乱が世界のエネルギー市場に大きな影響を与えるかもしれない」と報じた。

福島県の副知事だった川手晃(かわてあきら)(60)は、首都圏と福島県の対立に問題が矮小(わいしょう)化された、と振り返る。

「県はなぜゴネているのか、という声が強まってきました。それを知事に報告すると、信念をもってぶれずにやれ、と言われしました」

川手によれば、そんなころ、東電社長・勝俣恒久(かつまたつねひさ)(73)の側の打診と

して知事の後援会の幹部からある持ちかけがあった。

知事の自宅でお会いしたいー

佐藤は「取引したと思われたらいやだ」といったが、川手は「表には出さず、すしでも食べたらいいんじゃないですか」と助言した。

佐藤はそれについて、記憶になく、「断ったのでは」と言う。

「原発を半年近く止めていたわけです。これで見な、原子力の問題を本気で考えてくれるだろうと。夏場の暑くなる前には再稼働しなきゃならないなという気持ちはありました。今だから話せますが……」

7月10日、佐藤は原発再稼働について「了としたい」と東電社長の勝俣に伝えた。佐藤は

あえて「了解」とはいわなかった。

内部告発者：6 福島は第二の故郷

東京電力のトラブル隠しを内部告発したケイ・スガオカ(62)は1952年、カリフォルニア州サンノゼで生まれた。

母親は日系2世。戦時中は山口県で過ごした。戦後、カリフォルニアに戻ってきた。

スガオカは、地元の短大を経て、ガソリンスタンドや半導体メーカーで働いた後、21歳のとき、原子炉メーカー、ゼネラル・エレクトリック(GE)に入った。

とくにGEでこれをしようと、いう気持ちはなく、「仕事を持

ち、稼ぐためだった」と振り返る。

実家はスノルという小さな町にある。そこから車で10分ほどの場所にGEのバレントス原子力センターがあり、そこが職場だった。

山吹色と黄褐色にまだらに染まった草原のかた、青い空との境目のあたりに、ドーム形の屋根をいただく灰色の円筒が立っている。それがバレントス原子炉だ。

77年以降は毎年のように日本に出張し、各地にあるGE製原発の定期点検に合わせ、それぞれ働いた。

「73年に会社に入ったときに、最初にここで訓練を受けたんだ。そのあと、日本に行った。特に福島には何度も行った」

GEは57年、バレストスに原子力発電所を完成させた。

核分裂エネルギーで水を熱して沸騰させ、その蒸気でタービンを回転させて電気を起こす「沸騰水型炉(BWR)」。その方式では世界で初めて一般家庭に電気を送り出した原発として知られる。それは東電の原発の原型となる。

バレストスから車で30分ほど、サンフランシスコ湾の南の先に、「シリコンバレー」の中心都市サンノゼがある。そこに今世紀初頭まで、GEの原子力部門の本部があった。

その場所で60年代、東電の技術者たちは原子炉運転の教育と訓練を受けた。

ここで設計された沸騰水型の原子炉が、北緯37度、太平洋

をはさんでバレストスの真向かいにある福島県大熊町に据え付けられた。

スガオカにとって、福島第一、第二で10基の沸騰水炉が相次ぎ運転を始めた福島県は、重要な出張先となった。そこは沸騰水型炉の密集地としては世界最大だった。

「第二の故郷」——。スガオカは福島県の太平洋岸をそう呼ぶ。気の合う友人ができ、親しくなるにつれ、スガオカにとって、福島は特別な地となっていく。

内部告発者：7 故郷が核の最前線

1977年に初めて福島に出張したころ、GEの技術者、ケイ・スガオカ(62)は長髪でひげを生やしていた。まだ25歳だった。

東京電力福島第一原発の正門の手前で右に折れた先、海側のやや奥まった場所に、「ゲストハウス」と呼ばれるGEの宿舎があった。

玄関を入ったところにレストランがあり、その一角が小さなバーカウンターになっている。寮タイプの1人用の個室がたくさんあった。そこでスガオカは、宿舎マネジャーの山田光昭(やまだみつあき)(61)と仲良くなる。20歳代半ばの同い年でウマが合った。

山田は、大熊町の目抜き通りにある自転車店の息子だった。中学生のとき、ベンチヤーズの「10番街の殺人」に衝撃を受ける。ギターを自作するほどのめり込み、将来は音楽で生きたいと心に決めた。

そのころ大熊町で原発の建設工事が始まる。家の近くに東

電の社員寮が建つことになり、小遣い稼ぎにその測量を手伝った。

中学を卒業すると、東京都日野市にあった東電学園の高等部に進学する。別に電気をやりたかったわけではない。「東京に行きたい」が第一目的で、東電学園なら親の了承が得られると思ったからだ。

東電学園では、授業が終わると学校には内緒で新宿に行き、ライブのバンドで稼いだ。深夜まで音楽に浸る日々だった。

高3になったばかりの春、自分から退学した。驚いた親や町の幹部が「辞めるな」と説教に来たが、翻さなかった。

「ヘルメットをかぶる仕事なんていやだったから」

東京、佐世保、グアムと渡り歩き、米兵らを相手にロックやポップスを演奏して暮らした。それが25歳で大熊町に戻る。幼なじみの妻、恵美子(えみこ)(61)の妊娠がきっかけだった。

「田舎で子どもを育てたかった」

海水浴場のある熊川海岸は故郷の原風景だった。太平洋が広がり、南に目をやると「馬の背」と呼ばれる崖が海に突き出している。その光景を子どもと共有したかった。

しかし故郷に戻って気がついたのは「大熊町は核の最前線」ということだった。10年前に町を出たときには姿も形もなかった原発が、次々とできあがるうとしていた。

「とりあえず食っていくために」GE宿舎で働く。そこで出会ったのがスガオカだった。

内部告発者：8 面白いやつがいる

GE技術者のケイ・スガオカ(62)が35年余前に福島出張で仲良くなった日本人は、他にもいる。

白土栄一(しらどえいち)(65)。富岡町夜の森で「ウッドストック」というジーンズ店を経営していた。そこに1977年、サーファー仲間の山田光昭(61)が「おもしろいやつがいる」と連れてきたのがスガオカだった。

以来、スガオカは山田や白土の友だちグループのメンバーとなった。スガオカは日本語がで

きなかったが、2人はそんなことを気にもしなかった。いつしよにドライブに出かけ、海に行き、食事に行った。音楽好きも共通していた。富岡町の麓山(はやま)神社の火祭りでは、鉢巻き姿の白土の横でスガオカ、山田らが並んで写真に納まった。

白土のジーンズ店は76年に開店した。当時それは野原の中に一軒だけの店で、知人から「客なんか来るものか」といわれた。しかし、白土には見込みがあった。

「商業施設は、駐車場があればお客さんは必ず来る」。開店前に1年半ほど滞在した米カリフォルニア州で、車を運転して買い物に出かけるのが当たり前前の社会を目の当たりにしていたからだ。

白土にはもう一つ当てがあった。それは原発だ。

北東に7キロ離れた東京電力福島第一原発は1〜3号機が運転を始めたばかりで、4〜6号機が建設中。南東6キロでは前年の75年に福島第二原発の建設工事が始まっていた。経済効果は膨大なものになる――。

「商売にはいい条件でした」
高さ120メートルの排気筒が次々と立ち上がっていくのを見て、白土は「すごいものができるんだ」と思った。もやもやした疑問も残った。

「なんで人のいないところに造るんだらう。それも、東京で使う電気のために」

白土らとの付き合いは、スガオカにとって原発での仕事が終

わった後の貴重な息抜きの場だった。

スガオカは冗談めかしていう。

「秘密結社だよ。どんな社会にもあるだろうっ?」
信頼し合える友だちだった。

白土や山田はスガオカから原発の「裏の話」をよく聞かされた。「きょうは失敗しちゃった」とか「スパナを炉内に落としたり」とか……。

原発での作業は神経が張り詰める。気を許せる友人の前で愚痴をこぼすことで、いくらかは気が楽になることもあるのだろう。白土はそう思っていた。

内部告発者：9 日本人意識と誇り

東京電力福島第一原発のGE技術者、ケイ・スガオカ(62)らの遊び仲間。1979年、栃久保寿治(とちくぼとしはる)(59)が加わった。

富岡町でジーンズショップを経営する白土栄一(65)が「英語を話せるやつがいる」と紹介した。

栃久保は、福島第一原発の1〜4号機がのちにできる福島県大熊町の農家に生まれた。

原発の建設が始まるころ、GE関係者だけが住む宿舎施設が町内にできた。そこは「外人村」と呼ばれ、金網のフェンスで囲まれていた。

栃久保は小学生のころ、金網の穴をくぐって「外人村」に何度か遊びに行った。GEの従業員たちは家族で滞在していて、同年代の子供もいた。オーストラリア出身だという教師の家

を訪問したり、外車に乗せてもらったりした。

その海側でGEが建設作業をしているのはもちろん知っていた。しかしそれが原発だということとそのとき特別に意識した覚えはない。

中学3年のとき渡米する。米カリフォルニア州に農業移民として移住していた叔父に誘われたのだ。

米国で高校、大学に進み、レスリングの選手として活躍する。そのまま米国に住むつもりだったが、76年、父の体調の悪化もあり、帰国した。間もなく父は他界した。

そのころ福島第一原発では6号機の建設が進んでいた。同級生に誘われ、作業員として現場に入る。

履歴書を出して間もなく、東芝の関連会社の幹部とGEの社

員たちの会議に連れていかれた。ふたことみこと英語を話すと、GEの米国人技術者から「おお、英語ができるのか。あしたから来てくれ」。

現場で通訳として働き始めた。

栃久保は、日本語ができないスガオカの悩みを聞かされた。

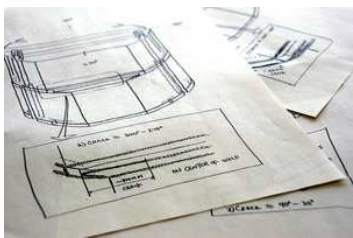
「日本人ではないが、アメリカ人にもなりきれない。そのはざまの葛藤みたいな、精神的な不安みたいなの、そんな愚痴をよくこぼしていました」

栃久保は、日系2世、3世のそういう悩みが理解できた。カリフォルニアの叔父の家に行ったことがそうだったからだ。

アメリカ生まれで、パスポートの国籍もアメリカだが、スガオカは自分のことを「あらゆる

意味で日本人」と考え、それを誇りに感じるという。福島での遊び仲間のグループの「メンバー」ならそのことを分かってくれていたはずだ。スガオカはそう振り返る。

内部告発者：10 消された「ひび割れ」



割れの場所が

記されたスケッチ

NPO法人「失敗学会」事務局長、飯野謙次(いいのけんじ)(54)によると、GE技術者のケイ・スガオカ(62)は遠隔操作の名人だったという。飯野は1980年代、GEで同僚だった。

「遠隔操作の工具は、物干しざおを何本も継ぎ足したように長ほそいんです。その端だけを持ち、ねじったりひねったりしながら、10メートル以上離れた水面下で部品を探したり、ネジを締めたりする。ケイはそんな離れ業ができた」

89年8月、スガオカは東京電力福島第一原発1号機の最上階にいた。

水が張られたプールの水面下にカメラを送り込む。原子炉圧力容器から取り出されてクレーンでつるされた蒸気乾燥器の表面をはわせるようにカメラを動かし、その映像を見つめる。

スガオカが初めて福島に来て12年。GEはその夏、東電から1号機の定期点検を請け負っていた。

蒸気乾燥器の表面に、ひび割れが見つかった。

1本だけではない。次々に見つかる。点検開始の翌日に新たに2カ所。3日目には中央の外周の溶接部に沿って3カ所。800ミリ、400ミリ、500ミリ……。スケッチの上に同僚が割れの長さを書き込んだ。

しかし東電はGEに報告書をつくりなおさせた。ひび割れ3本の記載を削除した。

スガオカはいう。

「それだけじゃない。その蒸気乾燥器は、本来あるべき向きとは180度異なる方向に据え付けられていました」

その問題も、改ざん後の検査報告書には記載されなかった。

スガオカはそれを上司に報告した。しかし何の反応もない。さらにその上の管理職にも報告した。すると、いい返された。

「東京電力からの依頼は、いかなる内容であろうとやる必要があるのだ、といわれました」

ビデオを編集し、ひび割れが映った部分を削除するようにとも指示された。監督官庁の通産省に見せるためだった。米国でそんなことをしたら刑務所行きになると後に知り、以後、スガオカはそうした指示があっても拒否した。「あんたがやればいいたろう、といいました」

元同僚の飯野はいう。

「ケイは腕のいい操作員というだけではありませんでした。

正しいことを声に出すことをちつともはばからない人だった」

内部告発者：11 万一のときの切り札

GEの技術者、ケイ・スガオカ(62)は友人仲間に会社への不満をもらすことがあった。

「何かあったときは、ばらすしかない」

そんな言葉を、GE宿舎の元マネジャー、山田光昭(61)は聞いている。山田はスガオカを励ました。

「正しいと思うならやっただけがいい。お前しか知らないこととがいっぱいあるんだから」

山田は、マネジャーの仕事を辞め、福島県富岡町で喫茶店「メロリーイエロー」を開業してい

た。富岡町は福島第二原発の町だ。

「ケイは原発の裏も表も知っているからね」と山田はいう。

スガオカの不満を、仲間の栃久保寿治(59)も聞いている。栃久保も原発の仕事を辞め、隣の檜葉町で学習塾を始めていた。米国暮らしで身につけた英語を生かした。

「福島で行われている事実を訴えるとかいう話はしてました。内容は覚えてません。でも、彼が本当にやるとは思ってなかった」

当時の栃久保にとって、原発の存在は「空気と同じ」だった。そこに存在しているのが当たり前で、違和感はなかった。

米国で学んだ英語やタイピングの技能を生かし、学習塾の

経営は軌道に乗っていた。小中学生だけでなく、大学院留学を目指す人や社会人も生徒になった。生徒の半分は「原発関係」だった。

1989年、福島第一原発1号機の検査結果について、GEと東京電力の命令で改ざんに加担させられたとき、スガオカは、その記録を手元に保管することにした。

「私は仕事のことをよく分かっているの、現場の管理職たちには気に入られていました。しかし上層部には嫌われていた。そのため、万一のときの最後の切り札がその記録でした」
98年、仲間にニュースが届いた。スガオカがGEからレイオフされたというのだ。一時解雇である。

79年のスリーマイル島事故
いらい米国では原発の新規発

注が途絶えていた。GE側はリストラに懸命で、日立製作所との原発事業統合を考えるほどだった。スガオカは、会社から「経費削減」や「市場の状況」などの説明を聞かされた。
しかしスガオカにすれば、納得のいくものではなかった。

内部告発しかない——。解雇から満2年となる00年6月28日、通産省に手紙を出した。

内部告発者：12 尊敬する親友のため

ケイ・スガオカ(62)の内部告発で、2002年夏から03年夏にかけて日本は大騒動となった。

東京電力の原発は、17基すべてが停止に追い込まれた。テレビでも新聞でも「東電トラブル隠し」が大きく報じられた。しかし、スガオカの名前は報じられなかった。

スガオカが「6カ所のひび割れ」を告発し、そのことが通産省から東電に伝えられた段階で、その名前は関係者には割れている。

スガオカの友人仲間て学習塾経営の栃久保寿治(59)は、決意した。

「ケイの行動が日本最大の電力会社を震え上がらせ、原子力行政を変えたということ、日本の国民に知らしめる必要が絶対ある、と思ったんです」

栃久保の学習塾ははやっていて、20万円の旅費や宿泊費を出すことのためにはいはなかった。塾の生徒の半分は東電と関わりのある家庭の子だ。塾に影響があるかもしれない。それは覚悟の上だった。

03年10月、スガオカを日本に招いた。

前年に記者会見で「トラブル隠しを公表した原子力安全・保安院の原子力発電検査課長、梶田直揮(57)に引き合わせた。栃久保は梶田と面識はなかったが、梶田にメールを送って面会の約束を取り付けた。

福島県知事・佐藤栄佐久(74)にも会わせた。栃久保は佐藤とも面識はない。知人が県庁の出先の幹部にあり、彼に頼み込んで会見を実現した。

03年10月9日、2人は福島県庁を訪れた。知事室に入ると、記者やカメラマンが待ち構えていた。

「今回、日本の皆さまに私の立場を説明したいということで、日本に来ることを決めました」

知事と向き合うスガオカの言葉を、間に座る栃久保が通訳した。

「私はGEの不正に焦点を絞って通産省に申し立てました。結果として大きな問題になり、驚いています」

佐藤はスガオカに「私どもの目を覚まさせてくれました」と感謝の気持ちを伝えた。

「日本の原子力がこれから安全を確保していけるとすれば、スガオカさんの力が非常に大きな布石になると考えております」

栃久保はなぜそこまでしたのか。

「親友としての尊敬の念です。これだけのことをした彼が見向きもされず、会社をクビに

なつて終わり、というのはおかしい」(奥山俊宏)

内部告発者：13 津波の音が響いた

2011年3月11日午後3時半、福島県富岡町の夜(よ)の森(もり)つつみ公園に止めた車の中で、ケイ・スガオカ(62)の親友、白土栄一(65)は、妻の博子(ひろこ)(49)と車のナビに映し出されたテレビ画面に見入っていた。

東日本大震災が発生して1時間もたっていない。映っているのが東京電力福島第一原発だということはずぐに分かる。第一原発とその南の海岸をとらえた映像が放送されていた。「見えないところが見えてる」

白土はつぶやいた。ふだんは波の下にある海辺の岩肌が、水面上に黒々と現れている。

サーフィンが趣味の白土にとつて、第一原発の南を流れる熊川の河口のあたりは見慣れた風景だ。その異常はすぐに分かる。今まで見たことのない大きな引き潮だった。

「でかい津波が来るぞ」

白土は車から出た。そのとき、「グオー」という大きな響きがあったので思わず空を見上げた。「ジェット機が飛んできたのか」と思ったのだ。それほど大きな音だった。

海岸まで4キロ。その近辺で、台風するときなどに海鳴りを聞くことはよくあった。だが、そのとき聞いた音はその10倍の大きさだった。

「これが津波の音なんだ、と思います」

車に戻って再びテレビを見た。

午後3時35分35秒、福島第一原発のすぐ南の崖で、襲来した津波が爆発するようにはじけた。その47秒後、同原発の建屋に津波が激突。波しぶきが垂直に立ち上がる。その高さは建屋の高さを大きく超えた。

「あ、これはダメだ」

白土は博子にいった。

「逃げよう。原発は壊れる」

第一原発の南西7キロ、富岡町夜の森でジーンズ店を始めた白土は、そのときにはカラオケ店やゲームセンターなどを手広く経営する会社の会長になっていた。社長は博子だ。

パートも含めて60人の従業員がいる。その全員に連絡して

避難を呼びかけるよう博子に指示した。

博子はそれほどの危機感はなかった。「なんでみんなに避難させるの？」と尋ねる。白土は「何もなければ明日戻ればいい。とにかく、いったんは避難だ」。

スガオカから原発で働く友人から現実を聞いていた。安全神話などあり得ないのだ。第一原発1、2、4号機が全電源を失いつつあるそのとき、白土は「当分帰ってこられないだろう」と覚悟していた。(奥山俊宏)

内部告発者：i4 マーク1型の欠点



さん

2011年3月、東京電力福島第一原発の事故は、米国でも大きく報道された。元GE社員のケイ・スガオカ(62)は内部告発者として新聞に次々と取り上げられた。

もう一人、内部告発の大先輩といえる人物が新聞やテレビに登場した。デール・フライデンボー(82)。それをきっかけに2人は初めて会い、福島を語り合う。

GEのエリート技術者だったフライデンボーは1976年2月、原子力発電の危険性を世の中に訴える活動を始める。勤続20年余の44歳で、約2

0人の部下がいた。その職をなげうっての告発だった。

当時、マーク1型と呼ばれる原子炉格納容器の改良を担当していた。福島第一原発1〜5号機にも使われているタイプの格納容器だ。しかしそれには問題があった。

「問題はとても重大で、その結果は受け入れがたいものでした」

76年2月18日、米議会でブライデンボーはそう証言している。

問題とは何か。GEの沸騰水型の原子炉は、炉心の圧力容器から水蒸気が放出されてきた場合、格納容器の下部のプールの水中にそれを導き、水で冷やして液体に凝縮させ、圧力を下げる仕組みになっている。ブライデンボーによれば、その際、プール内部に局所的に高

い水圧と強い衝撃が加わる。それがダメージをプールに与える恐れがあった。特にマーク1型の格納容器は構造が複雑で、心配が大きかった。

76年1月、速やかな是正策が約束されない限りマーク1型の原発の運転に賛成できないと、ユーザーの電力会社に言うべきだと上申した。しかし「そんなことをしたらGEの原子力ビジネスは終了だ」といわれ、受け入れられなかった。

76年2月2日に辞表を出す。その翌3日、新聞各紙に大きく載った。

GEのエリート原子力技術者が「原子力のリスクはあまりに大きい」と明言したのだ。それはビッグニュースだった。

のちに映画「チャイナ・シンドローム」を監修した。ジーン・

フォンダ主演で79年3月に公開された。

「あの映画が封切られた当初、『起き得ない話だ』とか『非現実的だ』とか、原子力業界からずいぶん批判されました。しかし、12日後、スリーマイル島原発の事故が起きた。その結果は、映画の中の事故よりもはるかに悪かった」

以来、アメリカは新規の原発をつくらなくなる。

内部告発者：15 ヘルボーイのひとり

建設途上の福島第一原発



原子力技術者デール・ブライデンボー(82)がGEでのキャリアを捨て、原発の危険性に警鐘を鳴らす。そのきっかけとなったのは何か。

それは、東京のホテルでの一瞬の出会いだった。オークラだったのか、ニューオータニだったのかよく覚えていない。1970年から74年にかけて4回、日本を訪れたときのどれかだった。

当時はG.E.の原子力事業部門で、電力会社へのアフターサービスを担当するマネジャーだった。

G.E.の原子炉が運転を始めて間もない日本原子力発電の敦賀発電所、東京電力の福島原発に足を運んだ。

「福島原発はとてもよく整理され、細部にも注意が払われていて、きちんとしているように見えました。サイトはきれいで、米国の原発とよく似ていました」

旅の途中、東京のホテルにチェックインした。

客室に案内してくれたホテル職員(ヘルボーイ)から「どんなお仕事でいらしたのですか」と聞かれた。

「原子力発電所にかかわっているの、ここに来たんだ」と答えた。

するとヘルボーイは一瞬、後ずさりし、「それはあまり良い仕事のように思えない」という意味の言葉をつぶやいた。

自分の仕事へのそのような否定的な反応は、ブライデンポールにとって初めてだった。

「私がやっていることが人類にとっていいことなのか、といわれたのです。大きな驚きでした」

サウスダコタ州の鉱業技術大学を卒業して53年にG.E.に入った。発電用の蒸気タービンを担当した。原発がまだなかったころだ。

58年、商業用の沸騰水型炉の第1号としてイリノイ州で建設が始まった原発で、タービン

据え付けを担当した。しかし次々と問題が起こり、その解決のため現場に残った。それから原発と関わるようになる。

原発という新しい技術のために働けることは刺激的で楽しかった。爆弾や兵器をつくるのではなく、一般の人々に届ける電気をつくるために働けることも誇りだった。

しかし、東京のホテルのヘルボーイから、それに初めて疑問を突き付けられたのである。

「彼のおかげで私は『私がやっていることはいいことなのだろうか』と自問するようになりました。彼に感謝しています」

76年2月の内部告発は、その問いがきっかけだった。

内部告発者：16 身の危険を感じた



元記者の

バーナムさん

G.E.の原子力技術者、デール・ブライデンポール(82)は会社を辞める前日の1976年2月1日、2人の同僚とともに、サンフランシスコの空港近くのホテルで新聞記者と会った。日曜日の午後だった。

新聞は3社。ニューヨーク・タイムズ、ロサンゼルス・タイムズ、地元紙のサンフランシスコ・クロニクル。反原発運動のグループが会見をお膳立てした。

ニューヨーク・タイムズの記者はデイビッド・バーナム(81)だった。ブライデンポールによれば、バーナムは「あなたがここに現

れてうれしいです」といい、カレン・シルクウツドの話 시작했다。シルクウツドはオクラホマ州にある核燃料加工工場の労働者だった。工場のずさんな管理体制を内部告発しようとした。

労働組合の幹部を通じてバーナム記者に連絡があり、74年11月13日、オクラホマのホテルで落ち合うことになった。ところがシルクウツドは途中で車で道路の脇の壁に激突し、死亡してしまった。

地元警察は事故と結論づけたものの、労働組合の幹部らは謀殺を疑った。バーナムは「FBIが予備的調査」との記事を書いた。が、結局、真相は分からずじまいだった。この経緯は後に、メリル・ストリープが主演する映画「シルクウツド」で取り上げられる。

バーナムの話聞いてブライデンボーは少し怖くなった。G

Eから危害を加えられる恐れがあるとはまったく考えなかったが、原子力産業の全体を考えば、危険なことをしようとする者がいないとは限らない。

翌2日、ブライデンボーはサノゼの原子力事業部門の本部にいつもの月曜日と同じように出勤した。頃合いを見て、上司に辞表を出した。

「私がGGEを辞めるのは、原子力が地球上の生命に及ぼすかもしれない影響を深く心配するようになったからです」

辞表を見た上司は聞いた。

「自分がやろうとしている」とを分かっているのか。彼らに利用されるぞ」

「彼ら」というのは反原発の運動グループであることは察しがついた。たしかに、反原発派

にとつてこの辞任劇は都合がいだらう。しかしブライデンボーは原子力に幻滅していた。これ以上、原発の推進にかかわりたくなかった。

翌3日、新聞は辞表の内容と告発を大きく報じた。

内部告発者：17 隠蔽体質を証言

内部告発者となったデール・ブライデンボー(82)は1976年2月18日、米議会の原子力合同委員会に呼び出された。告発の内容の証言を求められた。

76年、アメリカの原子力は大きな曲がり角を迎えていた。

GGE原子力事業部門の本部があるカリフォルニア州で6月、原発の新規建設を禁止する提案が住民投票にかけられた。既存の原発にも厳しい規制をかける内容もある。

賛否両派が激しい運動を繰り広げた。最終的には原発推進派が押し切ったものの、動きはほかの州にも広がっていった。

フォード政権は原子力政策の抜本的な見直しを進め、10月末、使用済み燃料の再処理の延期など規制強化策を発表した。11月には、原子力にさらに慎重なカーターが大統領に選ばれ、米政府は翌年、日本の再処理にも「待った」をかけた。

ブライデンボーらGGEの原子力技術者3人が内部告発に踏み切ったのは、そんな動きのさなかだった。

ブライデンボーは、2人の同僚とともに議会に出席した。

議会で3人が問題提起したのは、福島第一原発1〜5号機に

使われているマーク1型の格納容器の弱点だけではなかった。

配線貫通部の樹脂の弱さ、機器の多様性の欠如、共通原因故障の恐れといった技術的な問題から、政府の規制の不十分さ、平和目的の原発と核兵器生産の技術の密接なつながり、核拡散の恐れといった政治的問題まで幅広かった。

記録によれば、ブライデンボ―は米議会会で日本の原子力業界の隠蔽(いんぺい)体質も指摘している。

「日本の原子力業界は情報を非常に保護したがるという問題があります。新聞がスクープしない限り、彼らはほとんど何も公開しません」

ブライデンボ―によると、それは燃料の問題だったと思うという。

「敦賀原発だったように思うが、電力会社はその問題を、規制当局の通産省にもオープンにしませんでした」

ブライデンボ―ら3人の元GE原子力技術者はその後、コンサルタント会社をつくった。原子力安全について調査したり助言したりするビジネスだ。米政府の原子力規制委員会が顧客になったこともある。

「規制委は、私たちの懸念を検討しなかったと批判されるのを避けたかったでしょう」

事業は軌道に乗った。

内部告発者：18 水が止まれば終わり

ケイ・スガオカ(62)の親友、山田光昭(61)は昨年11月20日、避難先の宮崎市から、福島県双葉町の自宅を訪れた。2011年3月11日、震災の日

の夜にここを出て以来の帰宅だった。

前夜は相馬市に泊まった。午前9時半すぎ、ハイエースを広い敷地に乗り入れる。

「ただいまあ」

頭にしばりつけるように固定した防護マスクの中で、そうつぶやいてみた。

平屋の家の向こうに、屋根の3倍を超える高さの大きなブナの木が見える。葉は落ちているが、見事な枝ぶりが青空に映える。

「ただいまあ」

もう一度、呼びかけた。遠くでカラスが鳴いている。カア、カア、カア。庭の柿の木に、たくさん赤い実がなっている。

毎時13マイクロシーベルト。線量計にそう表示されている。

東京電力福島第一原発の原子炉から直線距離で3キロ余のこの家は、帰還困難区域の中にあり、事前に役場に届けを出して初めて立ち入りが許される。母屋の玄関の前に車を止める。軒先に震災前の洗濯物が干したままとなっている。トレーナーの青色はずいぶんくすんでしまった。

枯れ草に覆われた庭を見て山田は「しかしねえ」とつぶやく。「笑っちゃうよねえ」

もう、あの時代は戻ってこない。やっぱり夢も希望もない。その現実がこれだ、と思う。

離れの2階家に向かう。軒下に愛用のサーフボードがある。中に入るとギターアンプ。全部で9台。宮崎からわざわざ戻ってきた目的は、「この「お宝」を持って帰る」ことだ。

「この家に住んでいた30年ほど前、GE技術者だったスガオカがよく遊びに来た。

スガオカは、酔いつぶれてそのままソファで泊まることがあった。それほど酔っているときにも、折に触れて繰り返し返すことがあった。

「原発は水が命だ。水が止まったら原発は終わりだ。そのときはできるだけ遠くに逃げなければいけない。水以外では冷やすことができないんだ」

そんな言葉が脳裏にあつたから、11年3月11日夕、福島第一原発の異常を伝えるニュースをテレビで見た直後、山田は家を出ると決めた。

毛布を車に積み込み、家族と犬3匹。10キロ圏内に避難指示が出たのはその10時間後だった。(奥山俊宏)

内部告発者：19 「ごめんね」の重み

喫茶店経営、山田光昭(61)は2011年3月11日の震災後、避難指示より早く双葉町の家を出た。

その夜は原発から60キロ離れた福島県二本松市で明かす霞ヶ城公園の駐車場に止めた車の中だった。

14日、栃木県鹿沼市で3号機の爆発をテレビで見た。

もっと、なるべく離れよう。高速道路をひたすら走って、16日、徳島県海陽町の友人宅にたどり着いた。

親友のケイ・スガオカ(62)の「原発は水が止まったら終わり」という言葉の恐怖が意識にすり込まれていた。「おかげで早い避難ができた」と山田はいう。

海陽町で、米国のスガオカと電話で話した。スガオカは「ごめんね」と謝った。

スガオカは福島第一原発1号機を設計・製造したGEの技術者だった。トラブル隠して内部告発はしたが、それ以前には「福島の原発はアジアのほかの原発に比べればクリーンだ」と話していた。

それが事故になってしまった。そのことをスガオカは心苦しく感じているのだろうと山田は思う。

改めてスガオカに「ごめんね」の理由を聞いてみた。

「GEが原発を日本に売ったことを申し訳なく思ったから」

海陽町で山田は自作曲を歌って映像に収録し、4月7日、動画投稿サイトのユーチューブに

アップした。「We can stop it FUKUSHIMA」という歌だ。

「福島第一原発3キロ圏内の自宅から現在避難中のシンガー・ソングライター&サーファーからのメッセージング」との説明がつけられた。

「日本の空にキノコ雲 悲しい涙が星になる」

「この世の天国 地獄に早変わり」……

4月19日、九州に渡った。今は宮崎市内の別荘地で、妻とともに避難生活を送る。

月に数回、宮崎市内のライブハウスに向く。

震災から3年が経ち、人々の原発事故への意識も薄れてきた。ましてや福島から遠く離れた宮崎。そんななかでメッセージ性の強い曲を歌うのは難しい。

「脱原発関係のイベントに呼ばれたときは歌うけど、ふだんシリアスな歌を歌うのはへびーだね」

3月7日、震災3年前に宮崎市青島のホテルで開かれたイベントで、山田は半年ぶりに「We can stop——」を歌った。

内部告発者：20 「仕事と友情は別だ」

原発事故から7カ月後の2011年10月20日夕、米GEの元社員、ケイ・スガオカ(62)が成田空港に降り立った。8年ぶりの日本だ。

福島時代の友人、塾経営者の栃久保寿治(59)が空港で出迎え、抱き合った。

8年前の来日の際と同じように、栃久保が旅費20万円を出して呼んだ。彼の口から、原発の現地で何が起きているかを

世界に訴えてもらおうと考えたのだ。

東京電力福島第一、第二の10基の原発のおひぎ元で、スガオカの友人たちは、なにがしか東電とかかわりながら暮らしてきた。スガオカはその原発の不正を内部告発し、そのために東電の17基の原発が03年春にすべて止まった。

自分がその発端をつくった告発者だと03年秋に名乗り出るとき、スガオカは、友人たちに迷惑をかけてしまうのではないかと心配した。

しかしその後も彼らは昔のままのつきあいを続けてくれた。「仕事と友情は別だ」と態度で示してくれたことを、うれしく思った。

スガオカにとって、福島は「第二の故郷」だ。だから、栃久保

たちから呼ばれると、飛んでくる。

03年に来たときは、栃久保の手配で福島県知事の佐藤栄佐久(74)と会うことができた。

しかし佐藤は、親族企業の土地取引について責任を追及され、06年に知事を辞職する。その後、収賄の罪で逮捕・起訴されていた。

栃久保の境遇も変化していた。

檜葉町と大熊町で学習塾を経営し、200人の生徒がいたが、原発事故で避難指示の対象となり、家と仕事を同時に失う。ボックス車に家族と寝泊まりしながら、愛知県や茨城県など各地を避難して回った。3カ月後、いわき市に30平方メートル余の一部屋だけの

小さな事務所を借り、学習塾を再開した。生徒の数は以前の3分の1。夜は塾の板の間に布団を敷いて寝る生活だ。

そんな生活の中でスガオカを呼ぼうと思いついたのは、福島第一原発の裏表をよく知り、その不正を内部告発した当人だからこそ、ほかの人に見えないものが見え、世間の注目も得られる、と思ったからだ。

10月20日夜、成田空港で、栃久保は自分のボックス車にスガオカを乗せ、常磐自動車道を北に向かった。福島第一原発の現地がどうなったか。それをスガオカにぜひ見てほしかった。

内部告発者：21 不誠実、変わらない



福島入りしたス

ガオカさん

2011年10月21日、元GE社員のケイ・スガオカ(62)は、栃久保寿治(59)の車で検問を通り、福島県檜葉町の警戒区域に入った。

栃久保の自宅を見て、大熊町にある栃久保の学習塾に向かった。途中、東京電力福島第一原発の正門の手前まで行く。だれもいなかった。荒涼とした風景の中で、線量計の警報音が鳴りっぱなしだった。

内陸の幹線道に戻った。田んぼは雑草に覆われている。その向こうに、福島第一原発の高

さ120メートルの排気筒が見えた。

栃久保はそこで車を降り、スガオカにビデオカメラを向けた。彼の話を、日本全国に向けてテレビで流してほしいと思っている。そのために記録しておかなければ。

栃久保が「なぜこんな事態になったと思いますか」と尋ねた。

「東電は津波の歴史を過小に見ていたと思う。最悪のシナリオを採用しておくべきだった」

「GEにも責任があります。GEは原子炉を売った。GEは先生、東電は生徒でした。震災のときGEの技術者たちもここにいました。GEが問題を見落としたことに驚いています。恥ずべきことです」

栃久保は質問を重ねる。

「内部告発したとき、あなたはGEや東電に怒っていました。それは今も同じですか」

「同じです。GEも東電も不正直です。誠実さがありません。03年に来たときは、それは改まるだろうと思っていました。だが変わらなかった」

8年前の2003年10月に来日したとき、スガオカは福島県知事の佐藤栄佐久(74)に、自分の内部告発がきっかけとなって福島県のすべての原発が止められたことを心苦しく思うと

「さらに「原子力は将来も日本に必要です」と明言し、「日本で原子力に携わっている人は安全を重視している」ともいった。

しかし8年経って、言葉は変わっていた。栃久保のカメラの前で、彼は語り続けた。

「東電も経済産業省もGEも、ガラス張りの透明性がなければならぬのに、だれもそうではありませんでした。将来もそうはならないでしょう。それが原子力ビジネスのやり方なのです」

警戒区域を出ると、積算の線量計は24マイクロシーベルトを指していた。「原発の建屋内と同じ」とスガオカは思った。

内部告発者：22 二二に住んで下さい

2013年5月11日、福島県いわき市で、同県檜葉町の「復興推進委員会」が開かれた。檜葉町はほぼ全町民が避難している。ケイ・スガオカ(62)の友人の栃久保寿治(59)はいわき市に避難し、委員会のメンバーだった。この日の会合には、環境省の中間貯蔵施設チーム長、藤塚哲朗(ふじつかてつろう)(56)

が出席した。藤塚は、除染で出た土や廃棄物の中間貯蔵施設を檜葉町につくるかどうかの「調査」について説明した。

檜葉町は汚染の度合いが大熊町より小さく、遠からず避難指示が解除されるかもしれない。そこに中間貯蔵施設をつくって新たに放射性物質を持ち込もうとする。

栃久保は納得がいかなかった。しかも、それが「中間」で済むとはとうてい思えない。栃久保は手を挙げて質問に立った。

「あなたがたは中間貯蔵施設の担当者ですから、もしそれができたらぜひ、その隣に家族、孫まで連れて住んでください」会場は静まりかえった。

『「中間貯蔵」のそのあとに廃棄物をどこに持っていくのですか』

しかし藤塚は「なかなか難しいところがある」というばかりだ。

「この中間貯蔵施設は、あなたやわれわれの代で終わる問題じゃありません。子ども、孫の世代まで、ずっと続いていくんですよ」

栃久保はさらに迫った。

「あなたの家族がここに住めば、最新の情報が家族から得られる。それを今後の政策にきちつと反映できますよ。どうですか」

当事者は家族を連れて被災地に移住せよ。それが栃久保の持論だ。

司会者が「はい、それでは……」と引き取ろうとしたが、栃久保は「答えてください」と藤塚をにらみつけた。

「非常に重いご意見をいただいたと思っております。心して今後、いろんな仕事、業務の中に生かしていきたいと思えます」

原発の検査の不正について、スガオカはただ一人で内部告発した。それに比べて、自分たちは原発の恩恵に浸るばかりで、ずっと声をあげず、口をつぐんできた。栃久保はその悔いを感じている。

だからこそ、東京電力の担当者にも、町や政府の関係者にも、態度をはっきり示そう――。栃久保は藤塚が「住みます」と答えたら拍手しようと思っていた。しかしそれはなかった。

サーフボードをひとまわり大きくしたボードが海に浮かぶ。ケイ・スガオカ(62)の友人、白土栄一(65)はその上に立ち、パドルをこいで海面をゆっくり進む。

「スタンド・アップ・パドルボード」の頭文字をとって「SUP」と呼ばれる。新しいスポーツだ。ここ数年、世界中で愛好者が急増しているという。

仙台市に避難している白土は今、宮城県の七ヶ浜や奥松島・野蒜(のびる)海岸でSUPに取り組んでいる。インストラクターの資格も取った。

この4月、SUP協会の東北支部を発足させる。将来には全国大会を宮城県に誘致したいと思っている。

東日本大震災が起きる前、福島県富岡町の富岡漁港を出て、東京電力福島第一原発を

内部告発者：23 100年
後の帰還夢見て

北に遠望できる小良ヶ浜（おらがはま）まで、白土はよくSUPで北上した。途中、陸は20メートルを超える崖地となり、地肌がぬれて黒光りする場所がいくつもある。地下水が滝になって落ちているのだ。

「原発の汚染水も、あの地下水で困ってるんじゃない？」

富岡町には土地と財産が残っているが、帰還困難区域内にある。生きている間にそこに戻ることを、白土はとつくにあきらめている。

親たちから、先祖が富岡町に移り住んだのは鎌倉時代のころのことだと聞いた。白土はその35代目にあたるのだという。

町長を務めたこともある祖父が、そこに広大な土地を購入した。それを父が造成し、その上に白土が商業施設を建てた。

DVDやCDのレンタル店「創夢館（そうむかん）」。カラオケ店の「時遊館（じゆうかん）」。飲食店も経営し、商業施設にテナントを入れた。売上高は年間3億円にも上ったが、原発事故の日からすべて休業している。

800年かけて築き上げてきた土地を、たった40年のつながりしかない東電のせいで追われる。

「無念さはありません。国策の犠牲になった人は歴史上いろいろいるだろうけど、自分がそれにかかわるとは思ってもみなかった」

それでも「100年後にひ孫が戻ってくれるんだったら……」。先祖から受け継いだバトンをいつか子孫に渡せることを願っている。

2月、事業の借入金を完済した。ひとつの節目を迎えたと感じている。

秋には米国に旅しようと思う。親友のケイ・スガオカとも、もちろん会うつもりだ。

内部告発者…24 社会と乖離した「村」

「原子力村」という言葉がある。原子力関係者たちの集団を指す言葉として福島原発事故の発生とともにひんばんに使われるようになる。

東京電力の元副社長、榎本聡明（えのもととしあき）（74）は、その言葉が使われ始めたのは1980年代末だったという。

「そういうことを言う人はちよくちよく、80年、90年代くらいからありましたよね、社内では」

旧ソ連のチェルノブイリ原発で86年4月、炉心が爆発する

事故が起きる。原子力の危険性への関心が一挙に高まった。

東電社内でも、原子力部門の仕事ぶりが重要な経営課題に浮上した。企画部や総務部など事務系の幹部の口から「だから原子力村は……」という言葉が出てくるようになった。

榎本によれば、原子力村の中にも、大きく分けてさらにふたつの村があったという。

（1）原発を建設する部門。

（2）原発を維持・管理する部門。

榎本は前者・建設部門が長く、99年、両者を統括する原子力本部長になった。

一方、GEの社員だったケイ・スガオカ（62）が通産省に内部告発したのは、後者・維持管理部門が長年抱える秘密だった。

2000年7月14日、榎本は部下の原子力管理部長から、福島第一原発のひび割れについて通産省から問い合わせがあったと報告を受けた。

管理部長の深刻な表情を見て、榎本は「何かおかしなことがあると知ってるのでは」とぴんときた。

現場の福島第一原発からは「調べてもその事実はない」との報告があった。しかし榎本は疑った。

否認する東電に対し、通産省はその年の暮れ、スガオカから送られてきていた検査報告書を示し、「文書で説明された」と求めた。

これに対して東電は翌01年8月、「当社は承知していない」とする回答をした。

しかし榎本は、疑いながらもそれ以上の追及をしなかった。

02年、総務部門が主導して一連の経緯を検証し、9月17日、調査報告書が公表された。原子力部門は「閉鎖的」「独善的」と指弾された。

「長い時間をかけて限られたメンバーだけの社会が形成され、いつのまにか一般社会の意識と乖離(かいり)した組織となってしまうていた」

「原子力村」という言葉はこのときから広く一般に使われるようになった。そのきっかけがスガオカだったのだ。

内部告発者：25 原子力工学科卒の夢

東京電力の元副社長、榎本聡明(74)は1965年春、原子力工学科2期生として東大工学部を卒業し、東電に入社した。

先輩や同級生の大部分は、大学院に進学するか、研究所や官庁に就職していた。日本に商用原発が一つもなく、原子力産業がなかった時代のことだ。

そんななかで東電に入社したのは、「早く原子力発電を実現したい」という夢があったからだ。

入社後、研修所に配属され、支店、営業所、火力発電所、水力発電所の現場を回った。3カ月の研修期間を終えて7月1日、「技術部原子力発電課勤務を命ず」との辞令を受け取った。

そこでの仕事は、米国の原子炉メーカー、ゼネラル・エレクトリック(GE)から原子力発電の実務を学び取ることだった。新人も10年目社員も、原子力の知識や経験は同じようなレベルだった。分担して、福島原

発の設置許可申請書をつくった。

66年7月1日に1号機の申請書を国に提出し、安全審査を受けた。審査側の大学教授たちも原発を知らない。分からない点は榎本たちがGEに手紙やテレックスで問い合わせた。GEから「なぜならばGEがそう考えるからだ」という、木で鼻をくくったような答えが返ってくることもあった。

「当時のGEは鼻息が荒く、勢いがあった。俺のいうことを聞いていけばいい、という感じでした」

66年12月に1号機の設置許可があり、67年4月に福島県大熊町で基礎工事が始まった。同年9月には2号機の設置許可申請を国に出し、68年3月にその許可も下りた。

69年1月17日、榎本は生まれて初めて日本を出て、カリフォルニアに向かった。サンノゼのGE原子力事業部門の本部で訓練と研修を受けるためだ。29歳だった。

「GEは世界中に沸騰水型炉を建てていました。研修生はさまざまな国籍で、国際色豊かな教室でした」

半年間、授業を受けた。沸騰水型炉を設計した有名な技術者ともじかに話げできた。

「その分野の権威と直接に対話する機会が与えられたので、早く帰国して原子炉を動かしてみたいという気持ちが高ぶっていききました」

69年7月7日、帰国。18日に福島原発準備事務所の炉心管理グループに配属される。70年11月17日、1号機が試運転を始めた。

内部告発者：26 致命傷 げた可能性



制御盤とバッテリー

リー（東電撮影）

元GE社員のケイ・スガオカ（62）の内部告発で摘発されたトラブル隠しの責任をとって、東京電力副社長だった榎本聡明（74）は2002年9月、副社長と原子力本部長のポストを退いた。

辞任直後、榎本は業界誌「原子力アイ」の11月号で、後輩たちに「不合理があれば声をあげろ」と呼びかけた。

「40年近く原子力の仕事をしていた、数々のつらい経験をしてきたが、私自身、今回受け

た衝撃から立ち直るのは容易でない」

では東電は立ち直れたのか。

「立ち直れていないように思えます。個々の技術者は良心的で、技術のこともよく分かった信頼できる人たちです。それが組織の中に入ると、その村の文化から抜けきれず、村の掟（おきて）に従って動く面がある」

「私はそういう文化を是正すべき地位にいたが、十分なことができなかった。それが残念です」

月刊誌「エネルギーフォーラム」の10年9月号でも榎本は原発を扱う「人間」の問題を指摘した。

「原子力発電所は、何でもオープンにし、自由に批判し合う

風土にあるアメリカで、数え切れないほどの議論と改善・改良を積み重ねて今の姿になってきた」

では、何でもまずは隠そうとし、批判を恐れて口をつぐむ風土では、原発を動かすことは不可能ということなのか。

「そこなんです。そこを変えないと本当の安全はありません」

02年、スガオカの内部告発をきっかけに東電や原子力業界が体質を変革していたら、福島第一原発の被害はもっと小さくすんだ可能性がある——。榎本はそう思う。

「原子力のトップが現場のみんなを集めて、『大きな津波が来るという話があって、自分にはよく分からない。みんなで議論して、どんな対策ができるの

か知恵を出してくれ』といえはよかつたんです」

「そうすれば『バッテリーが水につかっちゃう』という話が出ていたはずですよ。予備のバッテリーを準備できていた」

福島第一には予備のバッテリーがなかった。震災発生の日後、所員のマイカーのバッテリーを取り外したり、いわき市までバッテリーを買いに走ったりした。そうしてやっと直流電源を確保したが、すでに手遅れ。それが致命傷になった。そのことを悔やみ、榎本は「涙が出る」といった。

(プロメテウスの罫)内部告発者：27 GEは口をつぐんだ



初めて会った2人

主催者提供

内部告発者のケイ・スガオカ(62)とテール・ブライデンボ(82)は昨年3月9日、サンフランシスコで初めて会った。

反原発団体「ノーニュークス行動委員会」などの主催で「原子力内部告発者大会」が開かれていた。ブライデンボは講演の冒頭、会場に「ケイはいるかい」と呼びかけた。

「電話では何度も話したし、新聞で彼の写真を見たが、実際に会ったことは一度もなかったんだ」

スガオカは一番後ろの席の右端に座っていた。司会が前に出るようにという。ちゅうちよしたが、結局、発言者席まで歩いた。ブライデンボと言葉を交わし、握手した。

会場で会おうとブライデンボには事前に連絡していたが、登壇するつもりはなかった。

「テールに会いに来ただけ」と言っていたが、発言者席に座らされてしまった。

2人はみんなの前で東京電力福島第一原発4号機について話し合った。その中で、スガオカはとんでもない事実を明らかにした。

「地震のとき、4号機にはGEの人間がいた。彼らは原発から逃げ出した。そしてGEは彼らを日本から出国させた。GEは口をつぐんでいるが、私は内部

につながりがあるから知っている」

GEの技術者たちは地震発生るとき、4号機の原子炉建屋にいた。それなのに、事故に立ち向かわず、東電を助けず、現場を離れたのだという。それは恥ずべきことだとスガオカは思う。

ブライデンボは4号機の使用済み燃料プールについて語った。そこには1千体を超す多量の使用済み核燃料がある。再びM9クラスの地震が来てプールが壊れ、水が失われると、大変なことになる――。

スガオカが「破滅だね」というと、ブライデンボは「そのとおり」と答えた。

スガオカは友人のことも語った。

「私には親友がいる。原発のすぐ近くに住んでいたが、いまは避難中だ。彼は東京電力に言った。家族を連れて避難区域に住んで、安全であることを示してくれ、と」

栃久保寿治(59)のことだった。

震災発生当時、4号機では、GEグループが原子炉内の隔壁の取り換え工事を東電から請け負い、作業が続いていた。記者はGEに、第一原発からの技術者の退去について説明をもとめた。回答は「この件にコメントを差し上げることは『ごまかせん』だった。」

内部告発者…28 地元にも責任がある



檜葉町の自宅前

の栃久保さん

今年3月9日、福島県檜葉町の役場の大会議室で、町の復興推進委員会が開かれた。委員会のメンバー、栃久保寿治(59)も出席した。

町長の松本幸英(まつもとゆきえい)(53)は「今春、帰町の判断をする」と表明している。しかし、帰町と決まっても、住民の全員が帰ってくることはないだろう。特に子どもたちが戻ってくるのは一部にとどまる。栃久保はそう予想する。

そんな中で、以前と同じように学習塾を営むことは不可能だ。

「住民の多くは農林畜産業も含めて、町に帰って事業を再開したい。しかし当初は戻ってくる人は限られる。スーパードアである医療機関であれ、赤字覚悟でやらなければならぬ。それはどうするのか」

栃久保の質問に町長の松本は「十分に私も承知している」と答えた。しかし栃久保の不安は消えない。

大熊町にある栃久保の実家は、環境省の計画案によれば、除染で出る廃棄物などの中間貯蔵施設の建設予定地に入っている。

放射性廃棄物という原発の負の遺産をどうするのか――。元GE社員、ケイ・スガオカ(62)の内部告発をきっかけに栃久保は震災前から何度も何度も繰り返し国、東京電力、町に問うてきた。しかし、だれからも答えは得られなかった。

「最初は、東京で半分、地元で半分を処理すべきだと思っていました。だけどよく考えたら、東京の人は電気代を払って電気を買っているだけのお客さんなんです」

「原発の恩恵をもっとも受けているのは、やっぱり立地の地元なんだと思います」

震災前、当時の町長に「檜葉町にある2基の原発から出た廃棄物は檜葉町の沖の海底の地下に処分せざるを得ないのではないか。住民合意に10年以上かかるでしょうが」と提案したこともある。

地元の「原発を受け入れた責任」を栃久保は指摘する。東電の隠蔽(いんぺい)体質が明らかになった後でさえ、町はチェック機能を果たさなかった。

「スガオカのような専門家を呼んで、自分たちの町にある原発が安全なのかどうか、町の人に知らせる。そういうシステムが必要だった。でも、それをしそこなかった」

「中間貯蔵」などとウソをついてごまかすのではなく、最終処分をどうするのかをはっきりしてほしい」。栃久保は大声で問いただし続けようと決めている。声を上げたスガオカを見過して。

内部告発者：29 声上げ続けていれば



サンノゼの

「ザ・プラント」

ケイ・スガオカ(62)の内部告発で東京電力のトラブル隠しが発覚した後、福島県知事だった佐藤栄佐久(74)は東電の社員を前に「今回の問題を小さくとらえないで、皆さんの悩みなどをしっかり受け止めるシステムを築いてください」と訴えた。2003年9月16日のことだ。

内部告発をした人を守る公益通報者保護法が制定され、06年4月に施行された。

しかし佐藤は06年10月、収賄容疑で逮捕された。無罪

を主張したものの、有罪判決。流れが変わった。

「その結果がこの事故です。

私から見ると本当に経済産業省もいい加減で、ウソはつくし、どこにも司令塔がなくて、ブレイキもかけられないで、ここまで来ちゃった」

スガオカは今、警備の専門家としてイベントなどの際に、パートで働き、生計を立てる。休日には高校バスケットボールの審判をして数千円(25〜66ドル)の報酬を受け取る。

スガオカからすれば、GEEと東電は、第二の故郷である福島を放射性物質で汚し、友人たちとの交友の場を奪い去った張本人だ。

自分のルーツは日本にあり、「日本人であることを誇りに思う」というスガオカにとって、福島と友人たちは、日本とのつな

がりを確認できる貴重なものだった。それだけにGEEと東電に対する恨みは強い。

デール・ブライデンボー(82)はGE時代の同僚と原子力安全のコンサルタント会社を経営していたが、90年代末に引退。太平洋の海をのぞむ家に住み、中米移民に英語を教えるボランティアなどをしている。

内部告発の声を上げた行為について、これまで何度も何度も分析してみた。そして「正しかった」との結論を得た。しかし、福島第一原発の事故については悔いが残っている。

「福島事故への責任を感じています。もっと大きく、もっと長く、声を上げ続けるべきでした。もっと私にやれることがあったのではないか。責任を感じています」

米カリフォルニア州サンノゼにあったGEの原子力事業の本部は、スガオカやブライデンボーが勤めた場所であり、元東電副社長の榎本聡明(74)が20歳代に原子力発電の実務を学んだ思い出の地だ。

今そこにGEはなく、「ザ・プラント(工場)」というショッピングモールになっている。